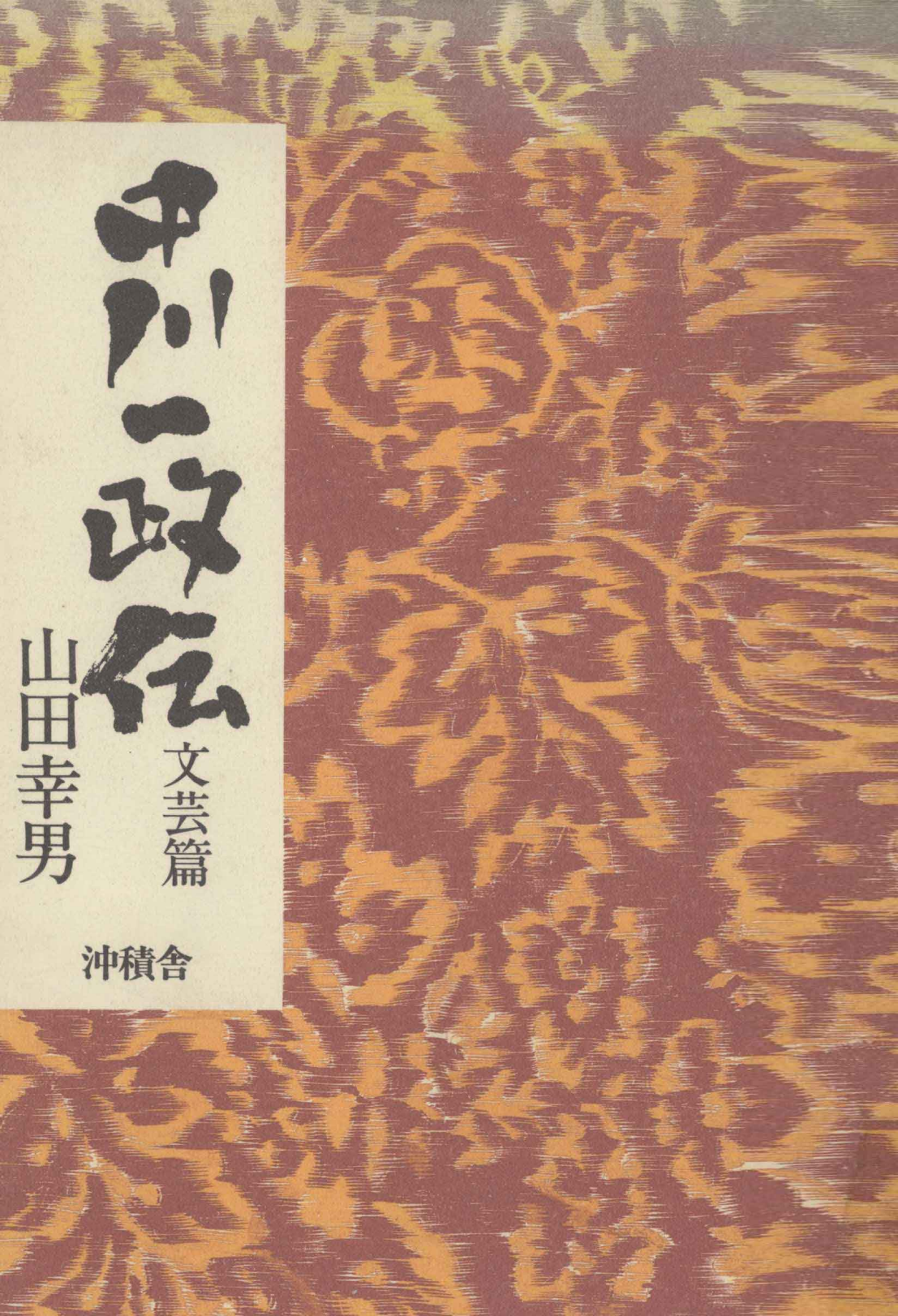




中川政任

文芸篇

山田幸男

沖積舎

中川一政伝「文芸篇」

平成二年九月六日発行

著者 山田幸男

発行人 沖山隆久

発行所 株式会社沖積舎

東京都千代田区神田神保町一五二郵便番号一〇一

電話〇三―二九一―五八九一 振替東京三―一七七六三二

ミツワ印刷 小高製本

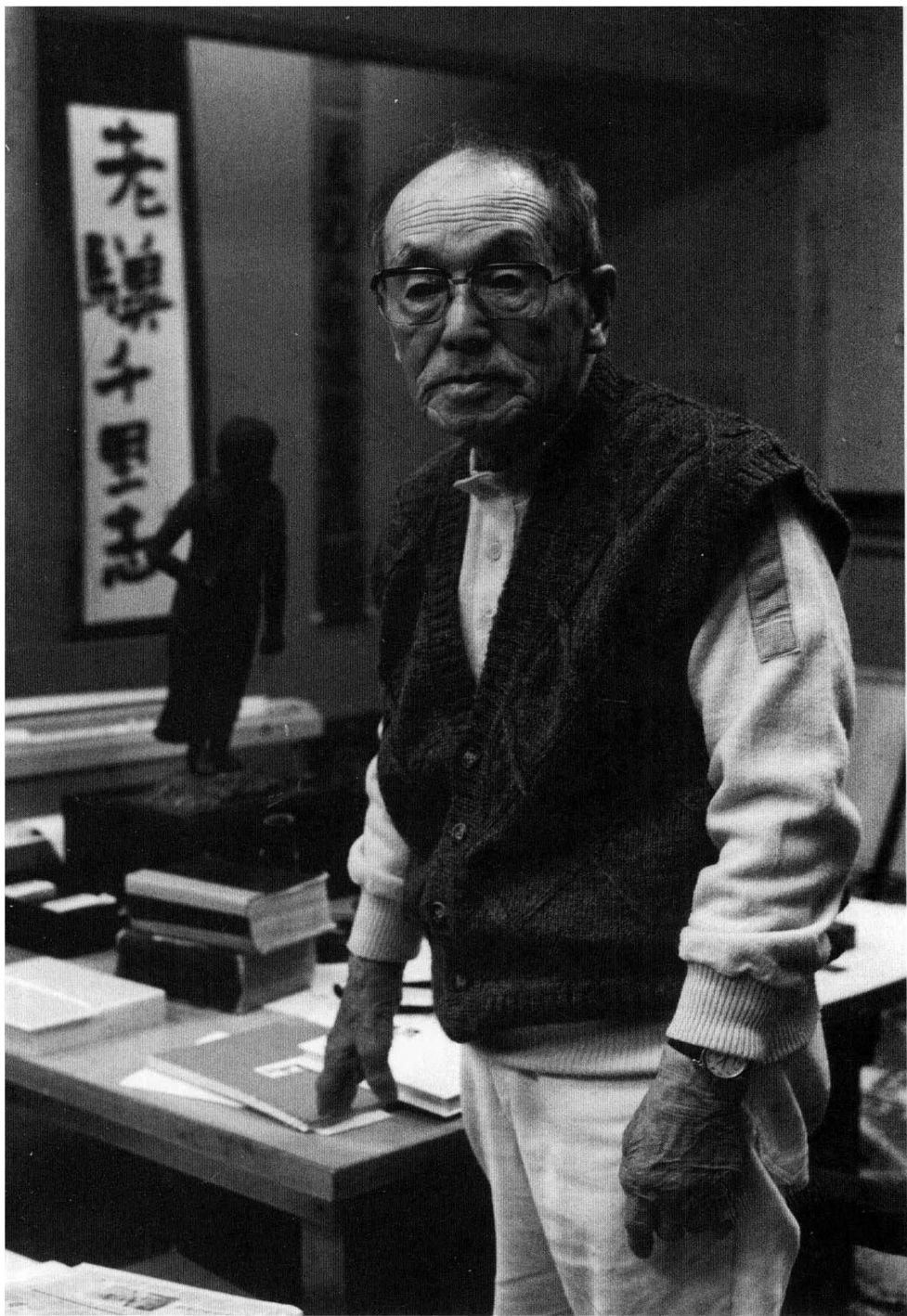
ISBN-8060 4550-0 C1095

中川一政伝

文芸篇

山田幸男

沖積舎



中川一政伝 文芸篇

目次

あらまし——円をなす捨身の芸術の始源……………9

I

詩集「見なれざる人」、訳文「ゴオホ」、「美術の眺め」……………33

II

「美術方寸」、「武蔵野日記」……………70

III

「庭の眺め」、「顔を洗ふ」……………80

IV

「春陽会随筆五人」、「美しい季節」、「二月桜」、詩集「野の娘」、
歌集「向ふ山」、「篋中デッサン」……………93

V

「我思古人」、「香炉峰の雪」……………129

VI

「見えない世界」、「モンマルトルの空の月」……………137

VII

「正午牡丹」、「道芝の記」、「うちには猛犬がある」など……………152

VIII

「遠くの顔」、「近くの顔」など……………170

IX

「腹の虫」、歌集「雨過天晴」、「随筆八十八」など……………175

X

「画にもかけない」、「つりおとした魚の寸法」など……………181

中川一政略年譜……………207

中川一政著書書目……………219

中川一政装釘書目……………250

あとがき……………280

装釘 菅原リラ
題簽 著者

あらまし——円をなす捨身の芸術の始源

中川一政先生は、年少の頃から文芸に天稟の資質を発揮された。その文業は実に八十年に及んでいる。

父・中川政朝、母・すわの長男として、明治二十六年（一八九三）二月十四日、東京市本郷区西片町に産声をあげられた。父君は金沢の刀剣鍛冶松戸家、母君は現松任市の出である。父方の系図は、寛文年間（一六六一―一七三）の陀羅尼勝重（初代）から始まるが、溯ると十七代前の来国吉になるという。「加州新刀大鑑」に「初代勝国松戸善三郎と言うは初銘家重である。」と記録がある。

JR金沢駅近傍堀川町の久昌禅寺（渡部金光師）は、松戸家累代の菩提寺で、同家の墓が數基並んでいる。初代勝国（四代）の墓は享保・宝暦年間の建立で、刀工だから墓石の頂を刀の峰になぞらえたものもある。寺の門前の四角な石柱の寺標「久昌禅寺」の文字は先生の揮毫で、左面に「為刀工陀羅尼家累代菩提 昭和五十七年子孫中川一政建立」とあり、この年の十月に建立された。

中川先生は肉親を愛し、祖先を崇敬し、先達、友人、後輩への敬愛、慈愛の念が殊のほか厚い。人のみならず、動物、昆虫などまで生きとし生けるものへの愛情の深さは、年少の頃からの詩文のいたるところにうかがえる。中川先生の人間性、ひいてはその芸術の根柢を集約すると純粋な「愛」

に根ざしているとい切ることができるだろう。

先生の履歴は、著書「腹の虫」(昭和五十年十月十五日、日本経済新聞社発行)に自ら語られている。私の作成した詳細な年譜もあるが、できるだけ重複を避けることにして、年少から壮年に至る文芸を主体にした軌跡の概要を辿ってみたい。

明治三十二年(一八九九) 六歳

四月、本郷区立(東京府)誠之尋常高等小学校(明治八年設立、現文京区立誠之小学校、この年代は尋常科四年、高等科四年制)に入学する。

「この小学校は東京でも有名で、私のいた頃の校長は日本ではじめて奏任待遇になった人である。」
〔腹の虫〕

校長は成瀬勝文(第九代、明治二十三年六月～同三十六年五月)、杉浦恂太郎(第十代、明治三十六年五月～大正十二年一月)で、奏任待遇は後者である。

この年一月に校歌が制定された。作詞・中村秋香(御歌所寄人)、作曲・小出雷吉。明治三十七年一月、文部大臣より認可があり採用された。校歌は二節よりなる。申請当時のままの一節(申請は一段、二段とされている)を披露する。

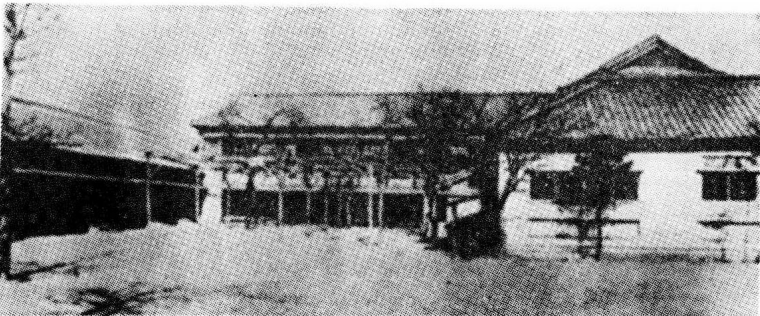
之を誠に おほし立つ 教の場の

若草は 天と人との 麗はしき

道のまに／＼ 茂るなり

注、「場」は現在「庭」とされている。

明治三十四年(一九〇一) 八歳



誠之尋常高等小学校 明治三十二年

今の世も人に知らるる楠氏かな

先生から楠木正成の話を聞き初めて俳句らしきものを作った。尋常科三年のときであった。六月十九日生母すわ病死する。母の遺言に「かたいものになろうぞ。」（「賢いひとになりなさい。」という加賀地方の言葉）といわれた。

明治三十六年（一九〇三） 十歳

東京府北豊島郡巢鴨村向原三二六八に転居する。巢鴨監獄の前であった。

明治四十年（一九〇七） 十四歳

三月、誠之尋常高等小学校を卒業する。この頃から短歌を作る。雑誌「少年界」（金港堂発行）に投稿した二首が一等となる。選者は服部躬治（落合直文門下）であった。

薄月夜都少女ら三五人語らひゆきぬ紅葉ちるなり

秋の野にさびしむつまじわが影ともつれてやさし小川の水と

四月、錦城中学校（明治十三年創立、三田英語学校と称したが、同二十三年四月現在地に移転、錦城学校と改称。同三十二年四月、改正中学校令に基き錦城中学と改称。）に入学する。

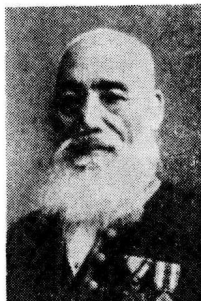
入学試験の作文に「雪」という題が出て、与謝野晶子の歌「地はひとつ大白蓮の花と見ぬ雪の中より日ののぼる時」（歌集「夢之花」）を引用して書き、作文の点が抜群で及第した。教師に漱石門下の野村伝四、野上豊一郎らがいた。

「校長は当時、矢野文（道）雄先生であつたが、顔を見たことはない。」（三十周年時代の錦城）
《錦城魂》昭和四十三年五月一日発行）

八月、「少年世界」の臨時増刊、「少年新聞」の増刊「休暇新聞」編集募集に応募して一等に当選し、論説、文苑、雑録など直筆記事が写真版にて収載される。同じく「少年世界」（九月号）にて募集



錦城中学第四代校長 矢野道雄



誠之尋常高等小学校第十代校長 杉浦惇太郎

された「少年世界」表紙図案懸賞に応募し、応募八六二点の中から二等に入賞する。

明治四十二年（一九〇九） 十六歳

短歌が「都新聞」新撰和歌（与謝野晶子選）などにしばしば入賞する。賞金があり、一等は一円、二等五十銭、佳作は二十五銭であった。

この年の春頃より前田夕暮の下宿東洋館にて「月曜会」が催され、尾山篤二郎、富田碎花、広田楽、中村琢郎らと夕暮を囲み徹宵談論することがあった。

明治四十三年（一九一〇） 十七歳

中学三年、若山牧水を知る。夕暮、牧水を知ったのは富田碎花の紹介による。碎花を知ったのは、錦城中学の二年上級に碎花の友人中村琢郎がいたことによる。

牧水主宰「創作」（明治四十三年三月創刊）に短歌、詩、散文などを寄稿、「中学世界」（博文館発行）などにも投稿する。

錦城中学創立三十周年祝賀歌の歌詞募集が行われ、これに応募し採用される。また全国中等学校相撲大会の応援歌を作詞する。

校内回覧雑誌「南風」の仲間となり、散文、短歌などを寄稿する。「南風」に勧誘したのは上級生（五年生）宮本武之輔（後年技術院副総裁）であった。

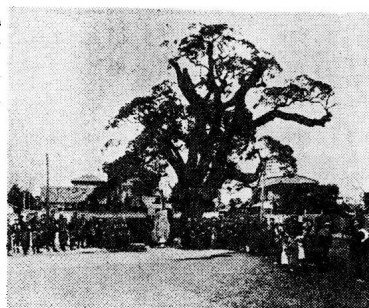
この年四月、「白樺」が創刊される。

明治四十四年（一九一一） 十八歳

七月、「萬朝報」懸賞小説に応募した「椎の樹」が当選、同紙に収載され、賞金十円を受ける。菊池寛らと競っての入賞であった。モチーフの「椎の樹」は、現在の阿部公園に聳えている。

前田夕暮主宰「詩歌」の特別社友となり、創刊号（明治四十四年四月号）、第二号（五月号）、第

現在の「椎の樹」



三号（六月号）に短歌を発表する。学校の帰途、「創作」発行所とされた牧水の下宿日英舎（麴町飯田橋川岸）に立ち寄り校正を手伝うなどした。

碎花（一八九〇年盛岡市生れ、訪問魔といわれた）の紹介により尾上柴舟、石川啄木、太田水穂、斎藤茂吉、三井甲之にも知る。

北原白秋主宰「朱槿」十二月号に短歌を寄稿する。

明治四十五年（一九二二）十九歳

三月、この月十三日、石川啄木死去。挽歌を作る。

啄木よ君が残しし幼子のさびしく遊び春暮るるらむ

錦城中学を卒業する。法政大学高等予科と独逸語専修学校へ通う。

「劇と詩」二月号、若山牧水主宰「自然」創刊号（五月号）、「スバル」十月号、「音楽」十一月号に、それぞれ短歌を発表する。

七月、「萬朝報」懸賞小説に応募した「おけら蟻姑の歌」（逝水賦）が当選、同紙に収載され、賞金十円を受ける。

大正二年（一九一三）二十歳

回覧雑誌「賜恩の花」を福永挽歌、森戸辰男、吉井勇、富田碎花、都田恒太郎らと作る。碎花が渋谷羽沢の斎田武三郎家（シオン教会）と昵懇にしていたことから、同教会でこれらの人を知る。誌名「賜恩の花」の賜恩は教会名のシオンに因む。

碎花の友人中村星湖の推薦により「早稲田文学」に短歌、詩を発表する。同誌には大正二年三月号から同五年六月号にわたり寄稿した。

私家版歌集「行雲篇」（大正二年六月十九日上梓、B4判十六頁）を発行して配布する。



「スバル」明治四十五年十月号

「早稲田文学」大正二年十二月号

八月、第二期「創作」復活号（第三卷第一号）に短歌、詩を発表する。

この年、兵庫県芦屋の斎田家の食客富田碎花の招きにより、碎花の食客となり、滞在一年余に及ぶ。「白樺」を愛読し、美術への啓蒙を受ける。

大正三年（一九一四）二十歳

六月、「創作」第四卷第六号に短歌、随想を発表する。

八月、日本郵船の欧州航路就航の三島丸司厨長北村亮造から土産にニュートンの油絵具を貰う。滞在中の芦屋から神戸まで歩いて受け取りに行く。芦屋深江にてはじめて油絵具により「酒倉」（四号）を描く。

十月、東京に帰り、第十四回巽画会展（上野竹之台陳列館）に「酒倉」を出品し入選する。日本画の団体巽画会に、この年洋画部が設けられ、藤島武二、中沢弘光、梅原良（龍）三郎、岸田劉生、小杉未醒、高村光太郎が審査に当たった。「酒倉」は劉生が推して入選した。

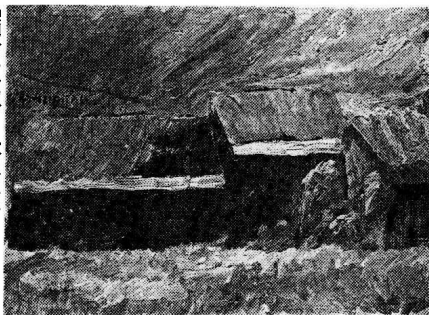
大正四年（一九一五）二十二歳

一月、「霜の融（と）ける道」を描く。ゴッホ、セザンヌに傾倒する。この頃、始めて代々木北山谷の岸田劉生を訪ねる。劉生二十四歳であった。

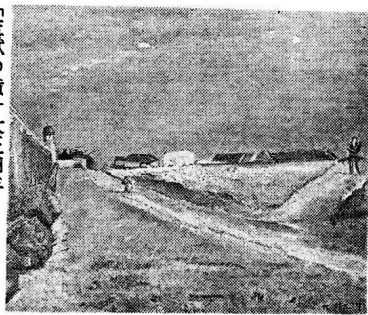
三月、第十五回巽画会展に「監獄の横」「霜の融ける道」「少女肖像」を出品、椿貞雄と共に二等銀牌を受賞（一等は該当なし）する。審査員は高村光太郎、有島生馬、梅原龍三郎、坂本繁二郎、木村莊八、岸田劉生であった。画家になる決意を固める。

十月、第二回二科美術展覧会（日本橋三越呉服店旧館三階）に「幼児」「春光」を出品する。

現代之美術社主催美術展覧会（銀座、読売新聞社楼上）に「秋の丘の道」「自画像」「デッサン」「監獄の横」を出品する。横堀角次郎、岸田劉生、中川一政、木村莊八、椿貞雄ら二十三名、一七



「酒倉」四号 大正三年



「監獄の横」大正四年

二点を展示、この展覧会を草土社展覧会と称することにした。名称は劉生が、この展覧会に出品していた「赤土と草」という作品からヒントを得て劉生が命名し、第一回展とした。

大正五年（一九一六） 二十三歳

一月、同人誌「貧しき者」（編輯・發行人・柏木俊一）を創刊。題字は武者小路実篤筆、創刊号の表紙にはミレーの詩が原文で入っている。表紙には聖書、ゴッホなどの言葉も原文で用いた。

創刊号（大正五年一月）に詩六篇、第三号（同年三月）に随想四篇、第四号（同年五月）に詩九篇、第五号（同年六月）に随想二篇、第六号（同年七月）に随想三篇と詩一篇、第七号（同年八月）に對話一篇、随想四篇、詩二篇、第八号（同年十月）に詩十一篇と美術評論、第九号（復刊、大正八年十月）に詩、雜感各一篇、第十号（同年十一月）に詩、雜感各一篇、第十一号（大正九年一月）に雜感一篇と意欲的に發表する。第五号より發行所（編輯・兼・發行人）を中川一政方（東京府北豊島郡巢鴨村向原）に移す。第十一号までつづく。第五号に武者小路実篤の寄稿を受ける。実篤のほか、ゴビノウ（渡辺吉治訳）、千家元磨らも寄稿した。

大正六年（一九一七） 二十四歳

九月、「中川一政詩集」が雑誌「観照」（編輯・發行人・渡辺吉治）の特別号として出版される。渡辺吉治は錦城中学の同級生で、七高（鹿児島）へ進学、東大で美学を専攻したが夭折した。

大正九年（一九二〇） 二十七歳

二月、千家元磨編輯詩誌「詩」創刊号に「詩稿」を發表する。同誌十月号にも詩を發表する。

この年、畏敬する武者小路実篤をはじめて邂逅する。この時、実篤は一政の顔を絵がき大の紙に写生する。横顔二つペン書。右端に「中川に似た人の猿顔（一年生）実篤」と記し、中央下部に、Musha (Hetazidai)〈武者（下手時代）〉とローマ字で記入されている。

中川一政肖像 大正四年岸田劉生筆



草土社メンバー 第三回展記念（大正五年）

